

A-10 M=エール病に対する高圧酸素療法の実験(オ1報)

(千葉労災病院耳鼻咽喉科) 河野 勇・鎌田慶市郎・海野久光

耳鼻咽喉科領域疾患への高圧酸素療法の実験は調べた範囲にないことは見当らぬ。われわれは今回近代病として増加しつつあるM=エール病をとりあげ、本症に高圧酸素療法を試みたと報告する。ともともM=エール病は1861年M=エールが著述して以来尚その本態は不明とされ内耳病変に加えて迷路外、誘因(自律神経系、水分必要、水分代謝不全)が関与し全く複雑なものとみられてきた。又内耳病変についてリンパ系、血管系の変化等定説がない。本症の治療は又種々行われてきたが何れも著効をみるに至っていない。われわれは高圧酸素療法における血流量、組織の酸素分圧変化に注目し本症への応用を思いついた。今回はオ1報として数例の本症患者の経験を中心として自覚症状の面での効果を得、オ2報以下で裏づけとなる実験的、検査結果からの成績をのべて行きたいと思う。症例は千葉労災病院耳鼻科に訪れた最近の患者で自、他覚的にM=エール病とされたもの全例である。アイカ高圧酸素室(型式IN-302)を使用した。加圧は5~10分、予圧1.6 kg/cm²まで加圧し20分解除し、減圧5~10分、1日1回を原則とした。

オ1例はM=エール病新鮮例で発作翌々日に受診、他の療法は一切行わず本療法を施行した。3回目より1ヶ月以上M=エール病、嘔吐、耳鳴発作が消失し5回終了後退院した。2ヶ月後の現在同様である。

オ2例は1年余より屢々発作に症状を呈し2回、ステロイドホルモン療法等による薬物療法も著効を示すこと無く経過していた例。本療法5~6回目より発症とみに軽減し2ヶ月終了後退院した。現在予後観察中である。

オ3例は数年来本症に罹りやみある薬物療法、内耳の手術療法を試みられた。2~3日以内の発作が経過した。本療法開始2回目的後身分乗降により以後頭重感、M=エール病不耳鳴りも軽減して16回で退院した。以後1ヶ月経過するも全く以前に存する発作は示しなかった。

オ4例は中程度のM=エール病、3回目の療法後M=エール病は消失した。12回で退院したが、耳鳴、聴覚は改善しなかった。

オ5例は比較的軽微なM=エール病発作を呈し2回退院、3回終了後より著効を示し現在頭重感と程度が浮動感のみを呈し治療継続中である。

オ6例、5回目終了後症状軽減、尚観察中。

以上の6例は概して軽微な症例であり、たしかにその効果は乏しいが、本療法中の一切他の治療を行わずに本療法のみを試みられたことは十分注意されたい。尚副作用は全くみられなかった。治療開始後日数が深く再発の如何は今後の問題である。他覚的検査成績等もあわせてオ2報で報告したい。